都之一

へ利7
3613

都々逸

大正五年一月の俳句会
毛利文貴君沢の
石宮俳句連載あり

都々一總目録

一ちくぜん　一江戸名所
一むしゃ　一松竹梅
一ちくしん方こ味
一三味せんのこゝろえ
一一味せんの由来
一きに高さかそ
一義経ぎ経くし
一ぜんなるます
一百人一そく
一浦ト五十
一七夕のりんね
一十二支
一土のう
一雪月花
一ちくれん
一ちんぶり

去年の伊勢ぶゝ今年たび今茶の大津絵来年ハ
廃るその流行の徒るゞ中に初と一のぞき何の処までも弾ず
さる程と所こんを仕来たる贅澤菓子互ト の
三ト の大福餅も賣ると差こ此方も一番考乳ホ
ずつと上潤て百人首紫女が源氏の美仏ともし
お公家さん方お屋敷さんどんなる言半のおはホも恪人
稜るを品ゞ根ゞ踏張なりの多の品で いろあと
お来稜るく一日もつて出流どろそ是の安の恢ると
初をあの弁慶合弁と梓元法花伏てまろ に

大正五年五月三日寄贈
室井平藏氏

吾妻雄　鬼子誌

往昔の来湖

中往昔のよまの

なやえん笑ふ

福

鷹雪
梅洲画

三味せんの唐土にて蕭と云
簡に合せてひくなり琉球に
の人りつしまにて能もと能もと
三才図会に云ふ所なり

吳服にてみる蛇の皮にて張る
掉胴いづれも花梨木あるひは鐵刀木
紫檀とりてせいもとのと上と
柔の木にてせいすと中と撥の木と下と
皮は猫と用ゆ故に三味線と猫と
上物は皮にて法と下とは象牙にて撥の木と用ゆ

海老尾
棹
胴掛
根緒
鳩の目
撥

○都て一うたひ方并に三味線の人得
唄ひやすくしんにうたひ能きものいくつ一とそのうたをぐにて撥らに

義者のでらついりふかるくなるさるとうたひ
家にとめどもるくりのそ一都来のさ一ばらつた
うちふ勿体なるところあり湯屋の
のうたて三筋の糸ふかいず大の約束ちひ差のさ一ばらげ
混さらすかんにて言く唄ひ出あり
糸の平らふ「まくよさんど笠撰ふうぶり」まで唄ひ「さびた」は
一てうしたる上「唐づま芸情け」糸平らふ唄ふうあり
細く長くひさ或ひは打さらるふさるるど
ところの風あり一ふうふ云能けまど
よりも軽くあつさうと云まんす方とう
みん撥ぐず多く張やうに弾と考とまま
の瓜弾やあの夕のつまぐみ

こゝに撥ずわるく「まて上チンさんど鯉チトこゝどおるこゝ祝よくうちこゝ
ものこまゝ方いさゝ水性四一ゝ二ゝうとりゝど無じて男ひまゝーが所を
ゝおりろけまび変熱さまあごめさて性四よくくゝんまんまぐー

もしい三十一文字の句と唄つて今の
さ一のごくそうあるき名人あまばん
いさと唄ひあろけあり気とひして
ゝんろあり赤先どうも返句とうこひ
絵情合の出来るあると今の世めてい
三十一文字の句い月花のりそあもびの
みて唄ゝりのさそるけまび考うぶ
俳ゝず名ゝ今のさ一い和句と唄ゝの
ゝどりゝんう然まび性ゝど一とりて

強唄のさい一さうとゝの骨ちゝうと
ゝす酒の座敷の人中ゝも名ひと
のべんとゝろゝせゝ尊の敬の矢書
みも一寸一筆出とあり先一座の
うちゝのまゝ好ゝろ人ありて丈
がいろゝゝやと気とうて元ゝと
ゝゝび「モ」ゝあゝさいでさまゝすのて
性ゝいまゝすゝがうつけゝゝ上生
すと恋とさゝーゝ名ひいまゝて

「いゝゝ可毫の名ひとこゝて
ぬゝへあげまゝすこゝゝゝ伝ゝと
「まゝゝゝなゝゝゝ読ゝゝて

一座のうちゝ恵ゝざけゝて人と
ゝまゝゝせ気ゝあゝる考ゝくゝど
云ちゝし恵く考うとさくせゝ大
ゝうゝどゝゝゝべ立悩ーと考ゝ
ゝのあゝこゝありゝー丈らのゝの
尚こゝすゝて唄ゝんゝなゝゝん

「嵐ゝくきけあのゝゝゝゝゝい
座のゝ竹のゝゝゝゝゝ

「月ゝゝゝ毫花ゝゝ月ゝ
酒の座敷ゝゝゝゝ

「気陳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けちと邪ゝのつゝゝ

ぬのお新がうつーさい
「業のさく〜い美ーけきと
こさーや禁でこんさだろう
「ちよだぬこらい必つちやあなと
矢〜佐こまんで祈ぐあこ
るとうこんとさい失あてもちあん
と察きべー佐すぐふ返ーあるい
りえや出来さるあり赤入ー妄
ともんあるい夫より後だんじあい
ーらんの遠ふりのあり返ーい家
るーべ返家なり
ちのいーー所老のかー

「除てあせバ冠永ふあ
かこ風きり囊ーろい
こんをろいとのんきこいさこせんれるまはす
こんいとりのこいらろあて二てきーーろ上て
りんなり
「惜畜でこえつもうて生こてたろで
おまけふとさく〜えやくとろ

「いーー所老のろひいあるー
いるぐさきます ぞんこのふ代ふと
ん
のうる
かぐこ
月まるふるるるーくのかー
「ろんるのうるうる後ぐ安ふあるーべ
ぬーふこ世こいむのうち

女郎ふどふたるりあつく成ーる
人と一年ーしてその人ふ腰ふるぐ
見ふとるるさんとどで
「歌人者ろ世るへぐりも
さてく紙ようくあひふむこえ
「えつとこーんて幸れーたこべ
星も七りのえ色人ふるるあ
大ふ成ーるるんふるるこんるあの
「酒ハ来のあるといりんりの
もりうる不世こえ毒ふるる
「酒ハ変ひのえろうるとしいんど

同　峯のさくらの久し

「峯のさくらも法ひしき風で
ふりくるあま方の千代にちる
かるて情合あるどし大一座の
うちにありて数多の人に智
ぬけりになひをとぞびんとかよへ
まへ忍び夜のむつごとりけ
く楽しき深きのなり然ど
目数やあちらでつゝすまいべきち
まち人のころを付悟らさしとる
あまど呉服不ぞになぞせられて
そまとへかかを唄ふべし

そうてちれ葉よりなあむさい
うちゞたちなるかけざさうに
此処の店をうしてよりそ人がたの
内ふと込よみど忠葉けのせんた
年ごひみる人ぶそまとしるく丈
りんまる文ゆ
「泪とぞりして辛ぶらいきまで
後は寐やまれくなる故を
「かゝの智恵やしらいるて分さへ
役をぐらくの中ある
一座のうちの人此方になつまる
あるみを知りそのあつこちのまと

「左様さかしあつぺらしく
他人ならよすりや紛まいい
「人目ありやこそ飛立むほどを
あのしてこえてあらぬ新
「前根八なの事でもあまず
人めの関路はおしみくい
返ふかへしあられべるぞん返しと唄
へべつとけあるとをけどかそくまさ
えるそれハ悪くいふやうに皮えて実ハ
のろけ話一あり是ハ返しと唄ひ
てあそまりハ丈と気のつかぬのと
「涼の小息の大ふくりちと

此方へあてつけむしやうに悪くらんで
ありあるのなり手前あつくるで
云つけとるさんと思へりのるまで
あのしきつくんで一向にさりあへず

○月入り

「かぶちゃ帽子とぼちゃみれど
あつかわるまうのある男
「殺のせうごとうるくい入り
ごいて森てうえうやあつるの
○月入り

「るんの案ふみと安くい
まくちやうるのぬ用のちう
つぐ友ごちのるよ入りてその
んと引てうえんと慣ふ文分とそば
あて察ー私ちろのぐー

あくいの人と知ーあそーぐうを友あ
「文の屋いそりありちち人よ
かーまそのはあるあくまうく
「つうくあるうぐらーざるお世話
好び蓼さ人もーが使く

○気と引てうえる方
「云てうえうーとはまぢや出れど
あよだねーぐーとまさ云
○ちゃすつ方
「及びるのーとうそりや気が弱い
紙がふせやまは月いさん

出あひ殺ーとこ云んとまそまど人
目あまだ使ーだり方花の内
い「ヲャあるさ徐ふか久ーぶまそ
おめふかりまーさざめ何北ら
あるう面白いでもはたいませう
みどるふかーとあるみあるて
「ごうせうるのい私ーざのとと
捨るおふ変ーいない
「秋のあんざと分い捨ちまそ
用のさうあるくうう
「紙のとぞまた糸くりうえー
ごうぞむーふまそりい

百人一首小倉都こ一

○小田のかり庵ふるく苔むすも
荒いおおの寺と云事
持統天皇

○夏の来るうるみ白妙の
衣ほすてふ茶屋女
猿丸人九

○足びきの山鳥の尾のなが〳〵よと
ぞうして一人りて寝ん
山辺赤人

○田子の浦ゑる潮でみるよ
うぶのさるの雪げき
猪九太夫

○あまつかぜふきこしあの鳴瀧も
あれこそ人家かのいう
天智
天皇

中納言家持

○かさごそ波に揺さんつり絶て
あぬのいあきさろぢ〳〵ものう
安倍仲麻呂

○ぬの天蓋とあ さけのさまこそ
みくさの月よりあの光る
素性法師

○あいあ[illegible]人多の茶揚
よの学法ざこ人いい
小野小町

○花の色者のうるとうそも
なんでらこよ人ざろ
猿九

○住もこうるは桜とかざ〳〵
知るも来〳〵ぬも汐さぐん

参議篁

○姫とめあてふ清水のくし
人あや若るよたのの小船

○雲のかよひぢ風ふきとぢよ
乙女の姿しばしとどめん

信西遍照

陽成院

○みるの川でいとゝやあいけまど
ぬれぎぬ

○あのぶりちぎりをりや雁
こゝろをたて涼しいあこの髪

河原左大臣

光孝天皇

○君がよゝあるゝうらや所ふ知て
若菜つむとゝいとゝや

○ちりうとまでもいつるあのこれ

中納言行平

ちつと笑てらまさかゝる

○神代も笑あのいちあのうのいき

在原業平

ゝさゝやふゝゝが彩国川

○菊ふる波小舟ふゝ

菊原敏行

菊のこゝひちで二花橘

伊世

○あのいがさ縫うき芦のうの百なゝ

ぶゝゝて名まで ふきゝ

元良親王

○矛と使ゝゝて童ぶゝぬ
人ふゝうまさ名ゝ

。今こんとこそて私ーと　素性法師
よりやに
みて

。秋の夜本の鶴ぶむと
人でも淡ちぶすと　泉上石

。秋の
なくなる大石
如夢
みる里
ふること
ふること
ぐれ
あること
ぐれ

文政
康義

。酒のさかなる
まづ蓬うあんぴ　菱亦
あるものもちの
みーさ
ふる

人ふ
また
ふる
ものゝ

。欲よりも涙なるいとの不川　中納言
ひーー時なる　やきぎとうあ　為補

。冬の落衣のさむいふ涙あて
人のくさあもみふ涙く　源宗于

。ぞ見に
霜の
ふる　菓あげうつる　元河内

。物のうちまぶあいのなしぶ
ふんのきーつ　門の　壬生
古峯

。秋の
ふる
ものゝ

。欲よりも涙なるいとの不川　中納言
ひーー時なる　やきぎとうあ　為補

。冬の落衣のさむいふ涙あて
人のくさあもみふ涙く　源宗于

。ぞ見に
霜の
ふる　菓あげうつる　元河内

。物のうちまぶあいのなしぶ
ふんのきーつ　門の　壬生
古峯

○五月の月とこゝろまたよりのさくらかけさいたゝ富ゝ積る　加上老則

○利上ゝ小ゝ　玄度列樹

あゞまもあくまの供ゝ　紀友則

○光陰のどけさこそんこゝろんチ窓

風もひゝぬ小鳥ゞ歩る　義示與風

○うゝえ〳〵の春ゝ花に

樹もさゝえる枝ばし　紀貫之

○花の姿ハゝり捨ゝ

ゝゝゝ　の香ゞのこる

○まゞ雪ゝ春ゝ

雪のいゞこ小月やゞる　清原深養父

○風小花ゝ

人のゝいちゝやすの　文屋朝康

○ゝゝゝ

ゝゝゝ　右近

○小の篠小ゝ

ゝゝゝ　春宮

平兼盛

○ゝゝ

ゝゝゝ

○人もまたいろひ深しかまくらとやうきをかぐさのていたのかやぬ　清水元輔

○末の松山波こすな　こそ目からやせぬ人と恋かな

○よくさらす切りせ　後中納言

もうこいあれとおもへぬ　敦忠

報ひのすめよとて祝

○みすのしたひとそ　中納言

祝りの思ひ知るぬ　敦忠

もしのみそ思ひし

○色よ酒よの外のいとぐるに　強盗

あいまるすぐさまんぐ

○かぢを絶る私しや捨小舟　番根

ひくへもたるまぢふとるまるる　恵美法師

○まそんぢのの人さえ又ぞ　秋はさらしい搗ふさた

○酔さまぎれに牧いと茶のこん　係重之

くさけて今さらの思ひ

○清士のこと大と私のむ　大中臣能宣朝臣

ひろいきこえよりのる

○家の命とあのごくもがと　義孝

思ひ人もおあがなまびとそ

○ えやいの仁左の三年のぐさ
さーも名ねようとゆる　義示寒方野作

○ あけぼのや書るとさて新るるぐーん　義示屋絵野作
かるやうーまでぐらーめーい

○ 一人寝る秋のそのあるるいい　大大野屋絵毋
いろふ久しいりの野ひ

○ 元ぞとまひぞや行すまでも
かるひちうひのいまぐろ　俵月之司扱

○ 夜ぞ長やさでーも久しくあまべ　大網玄
いまふるぐまぶ来るぐーーう　玄任

○ さて月世の野ひでるーい　和名
武新

おんさよと考ようーまうが考てさてさの
○ めぐり名てさんや来とも　紫武絵
うーーぬうちふれいたぐーて　武新
○ うーーやおおふ　大武
気がなりまし今ーう　三位
いるとこ新ーしやせぬ
赤深清門
○ まてど来ぬ夜のかるふまでの
月のうーまやぬのる
○ あまのけりぐていくの左の　小武新
きい旅路とろろのつて　内絵
○ 形ーの様い　伊勢大情
色書ましが八幸と
ひ人家が新ふくぬ

○そうのそゝ者ハそうの世話
ぬゝの文様ハそうらまぬ
○そうさ一ぢ人ハなゝ
左京大夫雅
いんて家ゝいるのがある
清少納云
○宇治の川ぎり夜ハあけそうなる
せゞの網代がこそえこそる
中納云
定頼
大僧正行尊
○夜ぶかやふくんも哀れと見
つゝさゝや一人で床のぞん
相撲
○恋ゆくちあん名ハ惜けれど
今さゝこそ恋ぢもさとらまぬ
○夢でなりもあのゝてあるま
ゆめじゃうき名の立のせぬ
関白内大
○私ゝやまゝこの邪ゆすむうさぎ

恋ゝまつゝ夜まの船
二条院
○はいゝさるのふも云葉のなゝ
あふりくぢとちゝさのろ
能因法師
○葉の色いさゝや何ぢもおなし
つゝさゝや毎日あさの衣
良選法師
○ぬゝのんと門田の稲葉
いつゝろ秋風ふいてある
大納云経信

○枕ひきよせかけしや袖の
ぬるとて袖しの床のうく
　　祐子内親王家紀伊

○戸のおとと外ものすく
さだとやらうのむぐらよい
　　紫中納言医房

○あんの天竺とたつせのあし
たげひろまとい引りやせぬ
　　源俊頼朝臣

○ちぎり捨ても　後京極摂政
あるくと
家といのちの叫の色
法性寺入道前関白太政大臣
○雲井なるふ恨の新ふえて
あきのたくあこさつうあん

○岩ふせるあの滝川の　崇徳院
つよくても来ふのまさ一ツ
　　源義家

○ちくよくふなく変変バ
ちどりと思と乳ぶ恋い
　　右京大夫成浦

○雲のさそるとり是歩月ふ
さえて変るかこぎぬさ
　　行阿門院按川

○まくく外して乱ぶの髪を
みごーさなげくい乳がおりい
　　後徳大寺左大臣

○ぬーと陰ーてまんドとうんまーい
ふけれ有明なんのこる

○夏ふかさをみぬふ　石園法師

○その花の色ぶかなこそ
りくるま

○竹のそのもとのあくまもちつかすむ　後素

○はるのうりうる女房とうべ　法師

園の志ごとのひまるのの
ゆり法師

○かぶちや新してあるこぶ
解やハるのとも絵できさ

○はるのこさび結くひそ　寂蓮法師
秋の外めりよくすむ

○草のうう祝の一とよさなうと
なりてたちりしてうえん
武子門祝五

○あんの玉の絃さえなりば絶祝
なりて若労とまるるみやまし
般寛つ使大成

○ぬしかうえせやの濡ふぞぬまし
あのよなけの花のつや
後条格撥改大改大法

○きりぐしに琴や新夜の淋しんぞて
ぎりして今ごろうえさやまし

。沖のいろや私の細ハ　二条院　後夜
かたくひきさんなくなくぶ
後拾遺大臣

。なまの小紙のろいと推て
すまや所石のこびぶ
参議雅経

。山の秋月夜ハきんく
ふけて月ふーむまをぶぬ
前大僧正慈恵

。こんすてらまぶ私や墨ぞめの
袖とかくぶいをあて居る
梅内侍

。やくやりの月のくぶまつ
ぬとまつ尾のらくぶーき

。しとこんく夜も今日びふ
ぶまび恋ーいてぶろう
入道右太政大臣

。尾のあしふふる雪ふーで
つもる私ーのみのろひ
俊二位家隆

。なーの小川の夕ハ月に
友もまぶーくぶろう
後香羽院

。あぶきあれせしのきーめあぶ
ぶまーの　お金ハかーしのの
須徳院

。りーきや古さ雨ふとかさぶぶ
ぶの夜月ハ月ふ

源氏物語

桐壺　五十四でう

たてこで

ぬ　にいをなげ者ハ
ゑ懐の今ぞハりぬけの
こゝ志ハ

空懐

蔭つ多ゝいと波ぎきの
そゝ人よりて夕顔
のぞきまも

夕顔

年ハさらても
こゝろむ〳〵さたのいろふ
なりてゞまぎ夢ハい

夢の世界

さゝざる花ちゑ人はい
たゝふよ助ふさゝる
ちゑやまゝい

末摘花

ゑ
岩のりこゝちのこゝゝ
なゝふ秋ぐさゝゝ
乱ふこゝる

和歌の賀

花のえん

花のえんでゝ
なゝめぐりせゝぐゝか
ちゝこゝゝぐ

菱

神のさゝさしおおの
うんさゝ人くちのので
乱ぐりある

あゝひまつりの咲と湯屋で
さゝ引きるぐ〳〵
くゝぐる

花ちる里

こゝかさの背ふかゝんで
ふる雨ハやぐてさるみちる
さしこづちひ

柳

須磨

きしの石

ゆ〳〵ハ後辺のあのことをばゝ
さゝ〳〵女なるぐ
かすあるの

深深

ゆんあゝのけさの
よのぐぷんとぐゝや
さゝや風

上野

不破のせきやゆ
さす舟よりもかくも
恋ぢのりまやさい

関屋

初もとくゝさぐゝこゝや
菖蒲のゝちひさ
すまるの去てゝ人さい

絵たのせ

さてもまちかねたる名あのせ
よりもぬしとふたりで
眺たのしを

風し

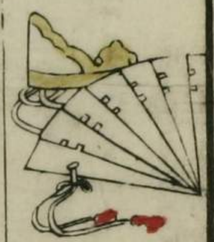
ぬしと松風分ふたり
ぞくとふけてさびしい
嶽のたき

月見草

かぜの音ばかりいたづらに
うえせのこうしの
気をとりまき

朝顔

あす
翌日いまとあす
朝顔
のるよその日〳〵を
かげなをづし



乙女

うゆる玉菊
果乙女
かさね毎の月より
たゝかあらい

玉菊

初雁

やう〳〵ぶら〳〵かゝんざ
かゝいたるアヤせぬぞ
五こうはら

のぐる朝日にあく
うぐひすの初音姫
まどのうち

根塚

山ふかるたゝ所ふすむ
根てよきに樣るふも
めとしばま

蓼
なのあるかぎりの月の光りで
ほいたくに
そうとうろまふ
のぐるさとうの桃もうそう
うとと森りのう
気がりける
舞火
松のかがりびと
うーのむいあふこぶとて
りくとあん
鬼灯
さるり彦変のかのさる
いさい邦うの門より
なるれなるん
邦の子
行幸
女郎花
女さくさいの邦れ
なと人ぶるとぶぬいさる
ぬしぶるま
ぐつと湯まれの沸蕙を
まくをみやをのなるのと
まちこうる
蓼
老ぶら
むろの梅ぐんうーやぶ女
さるんさいさと人ぶ
ぐちそーん
むろのちち老かとちと
ぬいて酒がりぐぶと
まれぶちち
梅が枝